

ロバート・ブラウニングの劇的独白詩「クレオン」

三 谷 正

(一) 序

この詩は、

「百合の花、点々と咲く姿そのまま

海上をレースの如く飾る島々、

幼な子の囁き声もて『ギリシヤ』なる響き伝えつ輝き誇る波を笑い迎える^①」

といかにも詩的な句で表現される多島海(Aegean Sea)の沿岸に住む詩人クレオン(Cleon)から同じく地中海沿岸に住むある国の王プロトス(Protos)の人生についての問いに対する答えとしての書簡形式の独白詩である。しかし二人ともエドワード・バード(Edward Berdoe)が「この詩の登場人物は、その思想が当時のギリシヤの哲学者の特徴を濃厚にあらわしてはいるが、史上の人物ではない」と言っているように^②、現在の人物ではなく、この詩の作者ロバート・ブラウニング(Robert Browning)の架空の人物である。この架空の人物クレオンを詩の表題とし、その表題のすぐ下に次のモトー(Motto)を掲げて、表題の人物クレオンの説明としている。

「汝らの詩人の中の或者どもも言えるが如し^③」

と。これは使徒行伝一七章二八節のポーロ(Paul)の言葉からの引用である。^④ オア夫人(Mrs. Sutherland Orr)はこのモトーが使徒行伝からの引用であることを述べたのちに、この句でポーロが言及したギリシヤの詩人或は思想家の一人に、この詩の主人公クレオンがなぞらえられていると言っている。^⑤ オア夫人のこの意見によっても理解されるように、ブラウニングはクレオンをポーロの宣教時代の人物であることを示す

ロバート・ブラウニングの劇的独白詩「クレオン」

と同時に、その時代のギリシヤ人を代表させ、その思想感情をも代表させている。ギリシヤ人は人生の喜びを追求してやまない明朗な民族であった。この喜び追求の表現が詩歌、音楽、絵画、彫刻、建築としてあらわれ、特にその華麗なギリシヤ美術は、今日尚世界の人々を驚かしている。このギリシヤ人の喜びの追求は永遠の若さの熱望となり、不老不死を希い、人間の老い衰えゆく姿を極度に恐れるに到り、それが嵩じて流石のギリシヤ人も老の凋落の哀愁に閉ざされてゆくのであった。しかしやがてかれらの間にもキリスト教が広がり、その教えの影響をうけるのではあったが、元来自尊心の強いかれらは、完全にキリスト教の信仰に入りかね、かれらの崇敬する人間的な神々の主神ゼウス〈Zeus〉にキリスト教的神格を認めようと努力する程度に止まり、かれらの哀愁は解消されなかった。このギリシヤ人の心情を、ブラウニングはクレオンなる架空の人物を把え来り、ギリシヤ人の喜び追求の姿を、詩歌、絵画、彫刻、音楽とあらゆる芸術に手を延ばす多芸にして多情多感の詩人クレオンとして表現し、その各芸術部門の多くのかれの作品の総括的な総合芸術論を語らせるのである。一方、老いの凋落の哀愁のギリシヤ人の心情をも、同じくクレオンに語らせるのである。クレオンは一般のギリシヤ人と同様に、その崇敬する人間的な主神ゼウスにキリスト教的神格を認めて、凋落の哀愁を解消しようと努力するのであるが、それも空しく、結局、その人生を、死への存在の人生、無の深淵にさしかけられた存在としての人生とみるに到り、不安と絶望のうちに人生を認めるキェルケゴオル〈Søren Kierkegaard〉的実存主義的的人生観を抱くに到るのであった^⑥。またブラウニングはクレオンに総合芸術論及び実存主義的的人生論を語らせるに際し、自らがヴィクトリア朝の進化論を認めていたところから、人間の進歩の概念をまじえて説かせるのであった。

(二) 使徒パウロ宣教時代のギリシヤ人の思想と感情

ギリシヤ人はゼウスを主神として、その下のアポロ〈Apollo〉、ディオニソス〈Dionysos〉、アフロディテー〈Aphrodite〉等の神々を信ずる多神教徒であった。これらの神々は、一面では超人間的な偉力を具^{そな}えていた。例えばゼウスは雷を起し、アポロは思いのままに霧や雨を揚げ降らすのであった。しかし他面では極めて人間的であった。即ちキリスト教の神のように信仰の対象として仰ぐ超越的神格をもつのでなく、地上より僅かに高いオリンポス〈Olympus〉の山上に住み、あらゆる人間的属性を具えた人間的神であった。従って愛慾、嫉妬などの感情があり、飲食や音楽の饗宴も開き、戦争にも従事するという人間的性質をもっていた。そしてこれらの神々の感情、性質はギリシヤ人の感情、性

質に反映するのであった。故にアポロの明朗性、ディオニソスの激情性、アポロとディオニソスの愛、美などはギリシヤ人の明朗であり、激情であり、また愛と美でもあった。ここからギリシヤ人の現世謳歌の性情が生れた。即ちギリシヤ人の光明的であり、青春を謳歌し、現世の楽しみのある限りを尽そうとする楽天的人生観が生れたのである。勿論ギリシヤ人にも暗い恐怖の死の世界、陰鬱で朦朧とした冥府というものも、かれらの思想の中にあるにはあった。しかし冥府の王ハーデス[^]Hades[^]は神であるにかかわらず冷淡に扱われ、暗黒の世界の神の役割は比較的には小さいものにされていた。要するにギリシヤ人は現世の享楽を望み、永遠の若さを希求してやまなかった。従ってあまりにも青春を樂しみ、光り輝く現世の美を汲み尽そうとするがため、その反動として老いの醜さと死を極端に恐れたのであった。この弱点に喰い入るかのように、永遠の希望[^]Eternal Hope[^]を説くキリスト教、或は神秘玄妙のうちに人生の解明を説く東洋の思想が伝わってゆくのであった。ここにギリシヤ人は自らの信条と外来のそれとの間にあつて心の動揺に悩むのであった。この間の事情をバードは次のように言っている。「ギリシヤ人の古い民族的信条がローマ人のギリシヤ征服により、次第に消え、かれらの宗教上の信条も衰えを見せた。そしてそれまで自尊心強く、自らの信条を一步も譲らなかつたかれらも、他国人の信ずる宗教を許容するに到り、且つこの頃、既に東洋の哲学が、その人生の神秘を解決する不思議な、精妙な試みによつてかれらの思想に影響を与え始めた。ここにギリシヤの到る処に漠然としてではあるが、亡びゆくギリシヤ人の信仰に取つて代るべき何か他の信仰への研究心と不断の切望が起り、単純ながらも切に愛を説くキリスト教がギリシヤ人の心のうちに、かれらの進むべき道を用意し、かれらの心を多少の差はあれ、キリスト教の信仰という良き種の育つべき適当な土壌たらしめるのであった」と。このバードの言葉を裏づけるかの如き詩句がこの詩の随所に見出される。例えば人間について

「時のはじめより神の子は絶対的及び相対的価値がある」^⑧
とか、また、人間は

「神の定めるすべての業を果す道具である」^⑨
などである。これらの句はギリシヤ人にキリスト教の影響のあつたことを示すものである。また人間的なギリシヤ的神々の王なる主神ゼウスについて

「到る処普く主神自身の存在を証する^{あかし}ような判断を聞きたいものである」^⑩

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「クレオン」

という句もある。この句には東洋の汎神論の影響が伺われる。当時のギリシヤ人の思想と感情がこのようであったため、この詩の中心人物クレオンは後に示すように、一面ではギリシヤの神々を信じ、あくまでも光明的に青春を謳歌し、現世享樂のあらん限りを尽そうとして、あらゆる文芸に手を出したのであったが、他面では自らの身が老いゆくにつれ、その心の不安と動揺を免れ得ず、ひそかに人間の未来についてキリスト教的不滅の希望（Hope of Immortality）を憧れるのであった。即ちかれは多神教を信ずるギリシヤ人として、神々の王者なる人間臭い主神ゼウスを崇めながらも、キリスト教の唯一神としての屬性をゼウスに移して

「人間の靈魂存在の神の意図を立証せんことを」^⑩

とか、また

「蛆虫が蠅になるように、われわれが来世に生れかわる」^⑪

ことの啓示をゼウスに求めているのである。これはクレオンの来世観を示すもので、ゼウスを唯一神と認めた言葉であって、明らかにキリスト教の影響がみられるのである。かくして当時のギリシヤ人は、かれらの信ずる主神及び神々が大自然の一面を象徴し、その象徴をば臚ろ気ながら見えざる力の神秘的啓示と思ひ、かれらの内心に抱く不安と動揺をそれによって救わんとしたのであった。然しながら唯一神のキリスト教の靈知によって得られる力強い神の啓示は、他国人の信仰の故を以て、正面きってこれを認めるにはかれらの自尊心はあまりにも強かった。従って芽生えはじめたかれらの来世観も実を結ぶに到らずして、相変わらずかれらの心の空虚は充たされず、その焦燥は残るのであった。

(三) プロートス王と詩人クレオン

王が使者に託した手紙と、王の心尽しの数々の贈物と共に美しい奴隷女を乗せた大型船が島に到着した。その情景を微細なりアリスティックな筆で描いた次の詩句で答礼の手紙の本論ははじまる。

「王の使者の一行は王の手紙を、只今、わたくしに渡しました。

わたくしはそれを読み、お声が聞える思いがいたします。

王の大型船の船長は、今尚、数多の贈物を降ろしています。

それらの贈物は、わたくしの中庭を塞ぎ、柱廊に沿って積み重ねられ、

夕日は眩ゆく輝いています、恰も陛下を思わせるかのよう。

黒い奴隷女と白い奴隷女が互に散らばってはいますが、ひとかたまりに寄り添っています。

それは、今しがた降り立った鳩で蔽われたようです。

それは、また、わがギリシヤ国特有の市松模様の鋪石のようです。

その集団から一人の奴隷の歌い女、その女は、サフラン色を織りませた橙色の服を纏っています。

その女が、白い両手を差し伸べ、盃がわたくしを恵むに先き立ち、王が口付けして言祝がれた酒盃と澆酒器をわたくしに献じました」

と。これはクレオンの王に対する細やかな感情の溢れる詩句である。次いでクレオンは人生の喜びを歌う詩人なる自らに対する王のこの手篤い計いの慈愛に満ちた行為は、人民の生活の真の意味の王の認識を示すものであると言い、また、王の意志がよき統治と社会の安寧によって、人民の生活を正しく豊かにするにあるは、王の善政であると言い、次いで王の高徳を称賛し、いとも抒情的な次の句を発するのである。

「王は王の人生の塔の日々の建設に於いて、日々の政事いかに激しくとも、人生の塔の建設には特に努力なされました。

そしてその建設進捗せず嫌気さすときであっても、また、建設工程捗り、人民の大喝采の起るときでも、

王は常に、建設のための仕事のみに従われることはありませんでした。

王は常に、人生の塔の完成の暁に、休息が誘き寄せられる希望を憶れておいででありました。

それは、建設工事の噪音のすべてが、やがて静まるとき、

王は万人に冠たる人として東天の曙光を望まれ、民草は王の塔のみを見るにすぎないに、王は太陽を見給うのでありました。

この故に、この記念すべき王の祝祭の日にお約束いたします。

神酒を注ぎ、海の彼方遙かを望み、ここに遣わし賜いし奴隷女に王の一生、王の偉業、王の英姿と共に、主神ゼウス永住の究極の静寂を

王の切望されるを物語らせます」

と。プロトス王は、その治世の目的として、人民が生活に倦まざることを希望しながらも、更に人生の目的の究極、人生の第一義を究めよう

ロバート・ブラウニングの劇的独白詩「クレオン」

とする偉大な王であることを称賛するのである。プロトス王はかかる偉大な王ではあったが、やがて年老いゆくにつれて、人並に老いの凋落の哀愁に包まれるのである。一方、クレオンは多芸の詩人であって、王の所有する黄金づくりの札の百枚の歌物語を書き、また漁師達が船首に松明を燃やして網を曳くとき、漁船から聞え来る小唄を作った詩人であった。或は漁師達が太陽を見る目を転じて眺める灯台の耀く太陽神の像を彫った彫刻家でもあった。また王宮の廊全体に互るトロイ戦争（Trojan War）の物語を描いた絵画家でもあった。更には、それ迄、世に知られていなかった男女の人体の正しい比例に通曉する科学者であり、靈魂に関する書物を三冊ものし、従来の学説の不合理を証した哲学者でもあった。音階を組合せ、新しい音楽を考案した音楽家でもあった。要するにすべての芸術、学問を自家薬籠中のものにし、行くとして可ならざるなき多芸の詩人であった。これはかれがギリシヤ人として生きる喜びを愛し、それを行動に移した教養いと高い多情多感の詩人であることを示すのである。更にブラウニングが、この多芸の詩人を近代的知性と鋭敏な感受性をもつ詩人に仕立てあげていることは注目すべきことである。即ちその知性に於いては、近代の進化論を理解して人間の進歩を認めしめ、鋭敏な感受性に於いては、未来についての近代的夢或は希望を抱いた詩人としてゐることである。例えばクレオンは人間の進歩について次のような夢或は希望をもつのである。

「これは夢であります。しかしまた、夢でなく希望としましょう。

年月と春と夏は、いつまでも衰えぬ力をもって、それぞれが巡り行くことの希望をもっています。

文化の進むにつれて酒を染める葡萄の味は、岩に這う野生の葡萄よりも風味豊かになり、

口当たりのよい李は野生味の核果よりも美味しく、

飼養の蜜蜂の滴らす蜜は野生のそれよりは更に甘く、

花は培養次第では一重から二重、二重から三重へと、また、八重にまで進化し、葉は花へと進化することの希望をもちましょう。

或は、雲の上に眠る月のように、絹の衣に眠る若くして肌柔かな、新月そのままの王の奴隷女が、わたくしの若い頃の女に優ることの希望をもっています。

このようでありますので、人間の理性のみがどうして退化することなど考えられましようか^⑩」

と。故にプロトス王がクレオンの多芸の理由についての問いに対し、先ず人間の進歩という考えを基礎として答えるのであった。クレオンは

同時代の多くの芸術家の心が昔の芸術家の心の単純、素朴よりも進歩し、複雑多岐の域に達していると説明し、かれもその芸術家の一人として複雑多岐の心をもつため多芸であると自信を示すのであった。そして更に言う。しかしかれを批評する当時の批評家の中には、かれの真価を知らぬものが多いと。そして自らの芸術論を次のように王に説くのであった。

(四) 総合芸術論

批評家がかれを批評するに際し、かれの芸術の一つ、詩歌のみを論じ、かれの他の芸術、絵画その他について論じないでかれを評価するのは誤りである。即ちかれらが、かれの詩歌の技のみについて批評し、かれの絵画その他の技に触れないのは、芸術全般についての芸術家の心の繋りとか、心の連続の状況を無視した批評である。人間の魂の業績には連続性がある。詩歌創作の心と絵画、彫刻などの創作のそれとの間には繋りがある。この点を批評家は注意せねばならない。ある芸術家の業績を部分部分に分析し、詩歌の分野と絵画、彫刻の分野とに分けて観察するのでなく、芸術の各部分即ち詩歌、絵画、彫刻のすべてが一緒にされた全体として観察されねばならない。芸術は、結局に於いては、全体として観察されるように意図されたものであるという。そしてかれは芸術の一つとしての詩歌と同じく芸術の一つとしての絵画、彫刻などのそれぞれをギリシヤ風の市松模様の舗道の菱形或は梯形の敷石の一つ一つに譬えて、この間の事情を説明する。一人の芸術家が、先ず完全な菱形を作り、次に斜方形を、それから梯形を作る。その芸術家はそれらをただ重ね、古いものの上に新しいものを積み、下のものの存在を消し去るといふのでなく、これらのすべてを平面上に列べ、最後に市松模様を作る。その結果が市松模様の舗道ができる。ここにかれがすべての敷石を平面上に置くというのは、一つの芸術だけを取り上げるのではなく、すべての芸術を等しく取り上げる、即ち芸術のすべての部分、すべての部門の詩歌、絵画、彫刻を平等の立場に置くの意味であり、市松模様の舗道がそれらを総合した全体の芸術であるとの意味である。かくしてある芸術部門の芸術家の技の柄の一つである完全な各部分が作られ、その後、その各部分の結合が行われ、全体としての芸術が生れて行く。ここに人間の進歩につれて芸術の部分従って部門も増加し、複雑になり、それが総合されて益々偉大な芸術が形成される。それは人間の社会が進歩した人間の個人の総合から複雑な立派な社会が成立されて行くのと同じである。故に究極に於いては複雑な総合芸術の形成を目的としているのである。次に、この目的を成就しようとの意欲の生じたのは、先輩の芸術家の単純、素朴よりも開化的、文化的に進歩し、複雑多岐化した偉大な精

神を持つに到ったからと自負する。しかし批評家はクレオンの複雑な進歩した精神と、先輩の単純、素朴のそれと比較するところに誤りがある。けれども先輩のギリシヤの芸術家のホーマー〈Homer〉、ターパンダー〈Terpander〉、フィディアス〈Phidias〉達^⑧は、かれらの才能の到達の極限に達し、世の称賛を博するに反し、クレオンは到底かれらの才能には達していないとの批評家の言に對しかれは言う。

「ある少し水のはいった球形の容器の内側の目盛りのある点に水が触れるためには、ほんの少しの水さえあれば充分である。

われわれがその球の容器を廻せば、廻わすという動作の当然の結果として、水は容器の内側に触れる。

一方、空の容器の中に普く行き渡っていながらも軽い空気は、手で触ることもできず、また、目で見ることもできない。

しかし空気は、この空の球の容器の内側の縁全体に触れることができる。

きつと水以上に充分触れることができる。

空気は本質的に水の三倍ものものを微妙な元素に溶解してもっている。

けれども俗人は水が目に見える高さであれば満ちたと言ひ、球にはいつている空気については、空気の水以上の目に見えない特性を知らず、空であると言ふ。

この故に、わたくし共の心は批評家には理解されていないのである^⑨」

と。ここに水は上述のホーマー、ターパンダー、フィディアスなどの昔の詩人、芸術家を指し、空気はクレオンなどの詩人を指す。クレオンはホーマーなどの詩人の素質を自分の中に溶し込んでいるが、世人はクレオンがホーマー程に目立たないため、空気の価値を知らないと同様にクレオンの価値を知らないというのである。また、クレオンは言う。実際かれはホーマー程の秀れた詩を書くことはできぬ。ターパンダーに勝つて絃を掻き鳴らすこともできない。フィディアス及びその友人達ほど巧みに絵を描き、彫刻することもできない。一つ一つの芸術を比べると、クレオンはかれらに到底及ばない。しかしこの四人がひとりひとりでは、自らの芸術以外の他の芸術に無知なものを、かれは自らの一つの心のうちに総合し、かれらの無知なものにも共鳴を覚え理解できると言う。結局かれは広く芸術する心をもっている。文学する心だけで詩歌のみを見るのではなく、芸術する心で詩歌、絵画、彫刻などすべての芸術を見るところである。ここからかれは従来の単純で素朴な芸術のそれぞれを総合して調和のあるより高度の芸術を完成しようと努力しているというのである。かれはこの自らの心境を比喻を用いて言う。

「野性の花は今あるものよりもっと大きくありました。」

わたくしは、バラの血をその野性の花の花弁に滲ませ、その花の盃の蜜に酒を注ぎ、ただ種だけであったものを果実を結ぶように改良しました。

そして、その花はさほど大きくはありませんが、立派な花を見せてくれます」

と。また、これについて自信を示して言う。

「わたくしは古人の及ばぬ一家の立場を持っています。」

この古人に卓越する立場は、神々がわたくしに与えた賜物であります。

故にわたくしは、自らの才能を、偶然にわたくしの手に入ったものだというような馬鹿げた口実のもとに不遜な態度で、わたくしの立場を軽々しくは論じません。

わたくしはすべての自負を捨てて申します。わたくしの立場はどこまでも神々に帰すべきものであります。神々の与えた天稟であります。

とは言っても、敢えて自卑もいたしません。この天稟が誰か他の人の手に落ちたと仮定してみましよう。

そのようなことが仮にあったとすれば、どうしたでしょうか。いや、そうはならなかったでしょう。でもそうだったとすれば、わたくしは、あわれ果敢なくこの世を去って行ったことでしょう。

それは兎も角、わたくしはせめてこの真相だけは世に知らせておきたいと思うのであります」

(五) 実存主義的的人生論

プロトス王は思う。クレオンは人生の栄冠と人生の目的を達成した詩人である故、今や人生の終りに近づき、死に直面しても、死を毫も恐れがないのではないかと。然るに自らは然らずとその悩みを次のように打ちあけるのであった。

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「クレオン」

ロバート・ブラウニングの劇的独白詩「クレオン」

「予はこの世に何も残さぬに、なんじは多くのものを残す。

なんじの生命は人々の歌う詩歌に、人々の習う絵画に残る。

然るに、生命の力と喜びに於いて、完全で健全な予の生命は、予の頭脳と腕と共に亡びる。故に何も残らぬ。

予が命名した岬に据られ、予の墓を見おろすあの銅像を、

予の跡を襲う王に詔う廷臣どもは、袍を着、笏もつ銅像の腕に、引くに好都合のロープをかけ、銅像を引きずりおろすこと必定。

そこで銅像は倒れ、予は亡びる。

亡びないなんじは勝利者というわけじゃ」

と。これに対しクレオンは答える。すべての人間は無意識の生活、本能生活に満足すれば幸福であり、本能生活を離れ、意識的生活従って精神生活に入り、多くの知識を得れば不幸を経験すると次のように説明する。

「人間には失敗があります。それはただより低い無自覚な生活を捨てたからです。

われわれはそれを進歩と呼び、この進歩は人間の霊が人間の本能生活を意識し、古い知識に加えられた新しい知識によって、禽獣にまさって、人間が一層高度に進歩することを明瞭にしたのです」

と。また、

「この進歩が人生のすべてとなります。

人生のすべてが人間の精神の楽しむ家、望楼、宝物を入れる城砦となります。

そして人間の本能生活は、精神生活の家、望楼、城砦などの周囲の平原にすぎなくなり、精神生活に糧をあたえる役目を果たすにすぎなくなってしまう。

精神生活が高塔となって君臨し、周囲の本能生活の平原を見渡すのです。

しかし悲しいかな、人間の精神は亡びるために高塔に登ることになるのです。

と申しますのは高塔に登らなければ見られないものを高塔に登って認めるのです。高塔に登り周囲を見渡せば、そこには喜びの可能な世

界がわれわれの周囲にひろがり、われわれの意を酌みとり、われわれを麾くのです。

そこでわれわれの精神はこれらすべてを樂しむことを望むのですが、われわれの肉体は『この塔に登る前の樂しみ以上に樂しんではならない、いや、塔に登る苦勞で精力を減じているから、その精力の減じた分だけ以前より樂しむことを少くせよ』と云うのです^⑧」

と。人間が日々、より高い意識を得て行くのは高塔に登るのと同じである。しかしそこから見える一切のものを樂しむのではなく、そこに登るごとと自体が一生の仕事となり、最後に登りつめたところで一生が終る。人間は人間の肉体の制限された受容力を越え、精力を増進し、肉体にあらたな油を注ぎ、老令と病氣による衰えを回復しようと焦るが、それは空しい^{むな}ことに終る。精神が喜びを見、肉体を誘うて喜びを得ようとするが、肉体にはもう喜ぶ力が無い。所詮人間はいくら進歩しても人間の有限な喜び以上の喜びには浸り得ない。人間が無限の喜びを望むのは分を超えたものとの意味である。クレオンはこの人間の姿を女神ナイアド *Naiad* の像に、人間の喜びをその像に仕かけられた細い管からの噴水に譬えて説明する。細い管から送り出される水は、山に包まれた低地を豊かに流れる川水からの一筋にすぎない。その川水はいくら使っても尽きない水であるが、この細い管からの噴水はいとも僅かなもので、女神の像は一本の細い水の外^{ほか}は水を噴き上げ得ない。これと同様、人間は造化の神の無限の喜びを見ながらも、人間は与えられた有限の人間としての喜びを享受するにすぎないと。結局地上の一切の生物は生命本能の限界まで進化し、結構幸福であるのに対し、人間は自意識を得て、有限の身でありながら無限の世界のものを求める。換言すれば有限の肉体という形体の人間が、無限の世界の無形なもの、言わば神の世界、神秘の世界、目に見えざる力に属するものを求める結果、生命の限界あるものが、その限界以上のもの、自らの力の及ばない世界のものを求めて不可能を可能にしようとする^⑨。この無理を敢えてしようとするが故に、人間は決して幸福になれないと云う。しかし王は前言を繰返し、クレオンは多芸であるため、死後に詩歌、絵画、彫刻の不朽の作を世に残す故に、芸術的天分を備えたかれの如き人間の運命は、一般の人間と異った例外的運命ではないかと問う。これに対しクレオンは答える。

「王は言葉に躓^{つまず}かれたのではないでしょう。喜びとは何であるかの正確な考えと、喜びの実際とを混同されているのではないでしょう。か。わたくしの考えは王のそれよりも明瞭なものです。王はいかに生くべきかを知ること及びいかに生くべきかを示すこと―これはわたくしの才能ですが―と、実際に生きることとを混同しておいでではないでしょう。この混同がなければ芸術家はどこで王に勝^{すぐ}れていましょうか。と申しますのは、若者、勇者、美人、賢人など色々な人がいかに行動したかを、わたくしは立派な叙事詩に書きました。これ

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「クレオン」

ロバート・ブラウニングの劇的独白詩「クレオン」

は、わたくしの、実生活の、行動と同じで、しょうか。もしわたくしが若いフィーバス（太陽神）を彫刻したり、描いたりしたら、それでわたくしが若いでしょうか。わたくしに芸術を学ばせた多くの年月の労苦に身を屈したがためにわたくしは老い込んだように思えます。

まことにすべての美を知ることはいよいことです。このすべての美はいかに楽しめるかを実践してみることはいよいことです。更に何も知らずに楽しむことは尚よいことです。あそこ筋肉の一つ一つが盛り上る腕で帆を下ろしている漕手の方がわたくしよりもっと楽しんでます。わたくしには恋の歌が書けます。ところが王の美しい奴隷女は歌そのものです。然るにわたくしは恋するにはあまりに老いすぎ恋を歌に歌うようになりました。ところが女は背中一ぱいに筋肉を波打たせている青年に心を傾けます。わたくしは王たる人の喜びを知っています。そしてあなたこそ王その人であられます。と申しますと、『しかし』と王は仰せられます。またしても王はただの言葉に躓いておられるのに驚きます。『お前の書くもの、描くものはあとに残る。そしてそれらは亡びることがない。またサフォール（Sappho）は生き残っている。それはわれわれがかの女の歌を歌うから。イースキラス（Aeschylus）も生きています。われわれはかれの劇を読むから』と。おや、かれらが尚生きているなら、かれらをしてわたくしに構わずここに来らしめ王の奴隷をとらせて下さい。また王の盃から酒を飲ませ、わたくしに代って語らせて下さい。わたくしが生き残り、王は死ぬとおっしゃいますか。いやむしろわたくしの運命の方が一層恐ろしいと仰せ下さい。わたくしの運命の恐ろしさのために、わたくしの快楽の感覚は、その洞察力が強められ益々鋭くなり、手は震え、年の重荷は加わり、ぞっとするような老耄がいよいよ激しく、人生の終局は避けようもなく訪れます。そのとき、わたくしの知識は益々増加しますが、しかも楽しみは衰えて行くばかりです。それでも尚、わたくしの真価を証明するすべての作品はあとに残ります。けれども人の口に於いては嘲弄されるにすぎなくなります。それでも尚残り、王の如き方に称賛されます。しかしわたくし、わたくし、すべてのものを感じ、すべてのことを考え行動する男、生活をとても愛した男は、矢張り墓場に眠るのです。』

と。これは人生の終りに安心立命を得たクレオンではない。死と無の深淵にさしかかるクレオン、絶望と憂愁、孤独と不安に直面するクレオンである。しかしこれはひとりクレオンのみではない。すべての人間の実存の姿である。然しながら人間はいかに果敢ない境地に立つても希望なしでは堪えられぬものである。そこでクレオンも言うのである。

「それがあまりに恐ろしいので、わたくしの窮境を救う気持から、時々敢えて心のうちに願うのです、来世が、現世同様に歓楽に於いて、無限の可能性のあることを主神が啓示されることを。」

そしてまた願うのです。来世を一層楽しい生活とするための神慮から、現世を窮屈な生活とされてはいますが、その窮屈さにあまりに心傷めつけられる故、死と呼ぶ激しい衝動によって解放されるとき、蛆虫が蠅になるように、わたくし達が来世に生れ変わることを願うのです。しかも蛆虫はまだ蛆虫の間に羽根があります^④。でもそれはわたくしにはならぬことです。主神はまだ無限の喜びの来世を啓示されてはいません。ああ、残念なことです。主神はそれを啓示なさるべきだったのです。もしそれが可能であるならばですが^⑤。

これはクレオンが人生の喜びの詩人としてギリシヤ的現世の享楽主義を以って、人生を生き通しては来たが、人生の終りに到って、不安と悲哀を感じ、ひそかにキリスト教的来世観を感じていたことを示すものである。然るにかれには尚、ギリシヤ人的自尊心が残っていたがために、他国人の考えだとして、キリスト教の来世観を斥けるのであった。そしてかれはこの手紙の終末に於いて、

「それから余の事ながら、ポーロと呼ぶ人への王の使者の持参せる手紙をどこへ届けるかを正しく言うことはできません。キリストと同一人でないなら、かれを知りませんし、無理に知ろうとも致しません。聞けばポーロは割礼をうけたユダヤ人であるようですが、そんなかが野蛮なユダヤ人がわたくし達に閉ざされた神秘を解するなどとお考えになることはできないではありませんか。おお、王よ、身を屈してあんな奴にお問ねになるのは、われわれギリシヤ哲学を辱しめるものです。」

かれは文章が書けますかね。まあ書けるとしましょう。だが、ああ、ポーロには弟子があるのです。この同じ島に立ちよった奴隷がポーロやキリストのことを説きました。傍聴したという者の言葉から推し量りますと、かれの説は到底正気の沙汰とは思えません^⑥。

クレオンはかく言いながらも自らの不安と悲哀は尚も克服することはできなかつた。しかし生活そのものに生きることを愛するクレオンなるが故に、残された人生を精一杯楽しむクレオンであることには変りはなかつた。それは王の問いへの答の結びの次の言葉に示されている。

「お仕合せに生きながらえて下さい。幸福の思いで往生なさることです。ありし日を満足なさいますように、御多幸に」^⑦

と。これはまた、ブラウニングが徒らに快楽を否定する偽善者ではなく、大袈裟に浮世の憂愁を口にして来世を説く似て非なる信仰者でなく、自らを両棲動物^⑧〈Amphibian〉として陸地^⑨を愛した姿そのままである。ブラウニングは「縁日市場のフィフィネ」〈Fine at the Fair〉の

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「クレオン」

ロバート・ブラウニングの劇的独白詩「クレオン」

序詞で亡妻を偲ぶ言葉の中で次のように言っている。

「天上に飛翔するまねをして、下界の海を泳ぎ廻り、しかもいつも陸上にその姿を現わすのを見てかの女はわたくしを憐れみ、訝いぶかるであろうか」^④

と。

六 結 び

ブラウニングはクレオンを多芸の詩人、総合芸術論を唱道する批評家として描き出した。それはクレオンが文学する心だけでなく、広く芸術する心をもつ詩人であることを示すためであった。文学に志すものが広く芸術する心をもてば、たとえ芸術の一つである文学にのみ止るとしても、文学以外の芸術に共感を覚え、自らの専門とする文学に於いて、媒材が広く豊かになり、それより流れ出る情緒も亦広範な豊富なものとなる。ブラウニングがアンドレア・デル・サルト〈Andrea Del Sarto〉やフラ・リッポ・リッピ〈Fra Lippo Lippi〉の画家を題材とし、またアプト・ヴォグラー〈Apt Vogler〉やガルビー〈Galuppi〉などの音楽家を題材としたのは、かれが広く芸術する心をもっていたことを示すものである。この故にブラウニングは自らの姿を、教養の高いクレオン、神の経綸に参画するかのようにならゆる美の表現に努め、総合芸術論を説くクレオンを描き出したのであった。クレオンはかく多芸であったため深く深く人生を見詰め、一瞬と雖も人生の喜びを見逃さず、現世の歓楽を無限に追求する詩人であった。しかしまた一方では老の凋落を知る哀愁の詩人でもあった。一般に詩人は人生の喜びを追求すると同時に人生の悲しみをも見逃さぬものである。ミルトン〈John Milton〉は「快樂の人」〈L'Allegro〉と同時に「沈思の人」〈Il Penseroso〉をものし、ブレイク〈William Blake〉は「無心の歌」〈Songs of Innocence〉をものすと同時に「有心の歌」〈Songs of Experience〉をものしている。結局詩人は人生の謎の追求に自らの魂を燃焼するのである。クレオン従ってブラウニングも亦、人生の生と死の謎に自らの魂を燃焼したのであった。しかも人生の生と死の謎は永遠の謎であって未だそれを解き得たものはないのである。ブラウニングは一面に於いて人生の理想の姿を追求したが他面に於いては人生の実存の姿を認める詩人であった。大体、人生の真、万人に共通する普遍的、絶対的な人生の真というものはあり得ない。寧ろ個別的、相対的のものであるとするのがブラウニングであった^④。かれが「指環と書物」〈The Ring and the Book〉

に於いて清純の女性ポンピリア〈Pomilia〉、高潔の僧侶カポンサキ〈Caponsacchi〉及び伯爵ギドゥ〈Guido〉等のそれぞれに自らの立場を弁明させているのがそれである。従って老の凋落の人の人生の受け止め方もそれぞれによって異なるものである。ラバイ・ベネズラ〈Rabbi Ben Ezra〉の如く崇高の情緒の静謐の境地に達するものもあれば、クレオンのように惨胆たる心境に置かれるものもある。

順調な人生行路を辿るものは満足感を覚え、悲惨な人生の連続であったものは絶望の淵に沈淪する。前者にあってもプロートス王及びクレオンのように老の凋落の終局に於いて不安と心の動揺に悩むものもある。後者に於いても悲境にありながらも尚、最後にキリストに縋って安心立命の境地に達し得るものもある。この場合、キリストの信仰によって救いが得られ、永遠の希望を得たものが人生に成功したと解し、不滅の希望を求めないものが人生に失敗したとは言えないと思う。そのいずれもが、その人の老いの凋落期の人生の受け止め方としては真実の姿である。いずれか一つのみを取り上げて、成敗を決めることは文学批評の埒外にあるものである。たとえクレオンがキリスト教的永遠の喜びを得なかつたとしても、かれの人生が失敗であったと見ることは文学として取り上ぐべき問題ではない。かりにかれがキリスト教的救いを得て安心立命の境地に立つとしても、クレオンの現実の亡び行く人間の姿そのものには何等変りはなかつたのである。ここにギリシヤの現世享樂の人間にも、またキリスト教的未來觀をもつ人間にも共通して言えることは、そのいずれもが、その根底に於いて、老の凋落の哀愁の心境にあるということである。この故に老の凋落の不安と悲哀はクレオン及び同時代のギリシヤ人ばかりでなく、すべての時代の、すべての国の、すべての人間に共通して実存する哀愁の情緒である。この詩が文学作品として存在価値のあるのは青壮年期の喜びの情緒をも伝えてはいるが、終局的には老の凋落のこの哀愁の情緒があるためである。ブラウニングはこの情緒をわれわれに伝えようとしてこの詩をものしたのであって、混乱期のギリシヤ人の思想そのものの伝達ではなく、またキリスト教的信仰による人生謎の解明を説いたのでもない。かれは二元的な詩人即ち主観的浪漫的客観的リアリステックの両面の詩人であったが、後者の面から人生を眺めるとき、人生は個別的、相対的に死への存在と見え、「指環と書物」の中でギドゥが言うように、人間ひとりひとりの人生の波は、それぞれ異なるも、結局は死の深淵に流れ込む^⑧という人間存在の憂愁を直視せざるを得なかつたのである。この人間の悲哀の姿、果敢ない運命をクレオンをして代表せしめ、この詩の表題とし、すべての人間の実存的哀愁の情緒を普遍化したのであった。

〔註〕

- ① Robert Browning : Cleon, ll. 1—3
- ② Edward Berdoe : The Browning Cyclopaedia, p. 112, ll. 20—22
- ③ “As certain also of your own poets have said”—
- ④ The Acts, xvii. 28 “for in him we live, and move, and have our being : as certain even of your own poets have said, For we are also his offspring.”
「我らは神の中に生き、動きまた在るなり、汝らの詩人の中の或者どもも『我らは又その裔なり』と言えるが如し」この句の汝らの詩人の中の或者どもの一人がクレオンであることを示唆し、主題の説明としている。しかしやがて本文で理解できるように、内心ではキリスト教の影響を受けながら、ギリシヤ人の自尊心からキリスト教を拒むのであるが。
- ⑤ Mrs. Orr : A Handbook to the Study of Robert Browning, p. 193, ll. 10—13
- ⑥ 高坂正顕 : 実存哲学緒言参照のこと
- ⑦ Edward Berdoe : The Browning Cyclopaedia, p. 112, ll. 22—35 (簡略に訳してある)
- ⑧ Robert Browning : Cleon ll. 120—121
- ⑨ ibid., ll. 122
- ⑩ ibid., ll. 123—126
- ⑪ ibid., ll. 112—113
- ⑫ idid., ll. 332 この句には東洋の仏教の輪廻の思想の影響も見られる。
- ⑬ 白人の奴隷女と黒人の奴隷女を白い鳩と黒い鳩とみたてたのである。
- ⑭ Robert Browning : Cleon, ll. 5—18
- ⑮ 外面的業績のこと
- ⑯ 内面的業績のこと
- ⑰ Robert Browning : Cleon. ll. 26—42
- ⑱ ibid., 127—138
- ⑲ ibid., 134—141
- ⑳ ibid., 99—112
- ㉑ ibid., 147—150
- ㉒ クレオンは自らは知らずして、創造主なる神の経綸に参画し、自らの才能も神の創造の一つの部分と考え、その考えの下にあらゆる美の創造を手がけたと解せられる。これもキリスト教の影響を受けた点である。

- ⑳ 真摯な学者的態度
- ㉑ 天稟のあったこと
- ㉒ Robert Browning : Cleon, ll. 151—157
- ㉓ ibid., 169—180
- ㉔ William Blake の “Songs of Innocence” に対し “Songs of Experience” を念頭におけばこの意味が理解できると思う。
- ㉕ 本能的、無欲の生活のこと
- ㉖ Robert Browning : Cleon, ll. 225—230
- ㉗ ibid., 235—245
- ㉘ 有限の人間が無限の世界のものを求めても不可能なことを、ブラウニングは劇的独白詩 “Fifine at the Fair” の Prologue (この motto が Amphibian となっている) で陸と水を有限の世界、空を無限の世界とし、無限の世界の空を飛ぶ蝶 (亡妻の霊を暗示している) が水に近づくが有限世界の水陸両棲動物 <amphibian> なるブラウニングは水を離れることができない (肉体を脱することができないことを意味する) ので蝶に触れることができないと、いとも巧みな比喩で説明している。尚 amphibian については註㉔及び㉕を参照のこと。
- ㉙ 歌劇 “The Barber of Seville” の若くして美しい Rosina に対する独身の老人 Bartolo と理髪師 Figaro の関係を思わせる。
- ㉚ Robert Browning : Cleon, ll. 278—323
- ㉛ キリスト教の抽象的な甦りではなく、現実の生身としての生れ変りを願うこと。
- ㉜ Robert Browning : Cleon, ll. 323—335
- ㉝ ibid., 337—353
- ㉞ ibid., 336—337
- ㉟ これは単語としては両棲動物の意味であるが、“Fifine at the Fair” の “Prologue” の中では、本能的、物質的、享樂的生活を陸上生活で、思索的、精神的、文学的生活を水上生活であらわしブラウニングがこの両生活をしたことを示している。そして更に広く、前者は下界、浮世を、後者は天上界、靈界をあらわし、同じくブラウニングがこの両界に想いをめぐらすことを意味している。
- ㊱ 下界、浮世の楽しみ。
- ㊲ Robert Browning : Fifine at the Fair, Prologue, st. 19 この詩句の意味は、次の通りである。愛する妻エリザベスの昇天の後、自らも天上に翔け上りたかったのであるが、肉体のまだある人間として、それもならず、せめて天上界に近いと思える海上を泳ぎ廻り (詩歌、思索にこと寄せて、かの女に想いを寄せること) それにもやがて疲れて結局陸上に帰る (享樂的生活をすること) このブラウニングの姿を天上から見下す亡妻エリザベスはかれの心を訝るであろうという意味である。ブラウニングが土臭い人間的な下界の人間なるにかかわらず尚天上界に望をかける姿、下界と天上界、肉と靈の両世界に行きつもどりつする姿を amphibian と言うのも極めて適切な表現である。

ロズー・トハカリハハの靈密界に據「ハムヤハ」

ロズ・トウ・ハリスの『クレオン』の「劇的独白」

- ④ 大庭千尋：ブラウニングの「劇的独白」（鹿児島大学文科報告第三にあり）に詳細な説明がある。
- ⑤ Edward Dowden が *The Life of Robert Browning*, p. 195, ll. 25—28 で「『クレオン』に於いて人生の謎を解決するためには、また、人間の霊の要求に答えるためには最高の教養を身につけていても異教信奉では失敗であることをあらわしている」と言っている。この言葉はブラウニングのこの詩の創作の意図に対しては程遠い言葉と思う。
- ⑥ Robert Browning : *The Ring and the Book*, Book XI, ll. 2346—2365

〔参考文献〕

- 1. Edward Berdoe : *The Browning Cyclopaedia*
- 2. Edward Dowden : *The Life of Robert Browning*
- 3. Mrs. Sutherland Orr : *A Handbook to the Works of Robert Browning*
- 4. C. Potter and H. A. Clarke : *Browning, Men and Women, In a Balcony, Dramatis personae*
- 5. *ibid*, *The Ring and the Book Vol. I*
- 6. *ibid.*, Vol. II
- 7. Kenji Ishida and Rinshiro Ishikawa : *Men and Women (Vol. II) by Robert Browning*
- 8. 大庭千尋：ブラウニング「劇的独白」（鹿児島大学文科報告第三号）
- 9. 大庭千尋：クレオンほか（鹿児島大学文理学部文科報告第12号）
- 10. 高坂正顕：実存哲学